

人間研究会

背景

昨年度の研究会では、「人間」という概念が歴史的に、典型的な人間観(近代・西洋・白人・男性)に対立するような「他者」(前近代・東洋・黒人・女性)と出会うことによって、様々に変化してきたことを確認した。このような昨年度の成果を踏まえて、今年度は、「人間」とその「他者」との関係に重点をおいた研究を行う。
この問題は、世界中が新型コロナウイルスの対策に追われている現在、特に問うべき問題である。テレワークやオンライン授業などの遠隔技術を用いたコミュニケーションが一斉に試行されている目下の状況において、私たちが「他者」と関わる仕方、および「人間」の在り方は大きく変化するということが予想される。

目的

「人間」とは何か一人間の再考—

これまでの「人間」の在り方を再考しこれからの「人間」の在り方を見定めていかなければならない。

運営方法

場所:主にZoom/究論館プレゼンテーションルーム
頻度:月に1、2回
形態:①研究発表・議論 ②読書会

- ①各自の専門分野について初修者にも分かり易20分で報告 質疑応答と議論
- ②読書会とあらかじめ設定した共通課題についての討議

メンバー・研究内容

文研・哲学／蛸子良風(代表)現象学・レヴィナス
国関／北和樹(副代表) AIロボットの国際的ガバナンス
文研・英語圏／本井佑衣 認知科学・対話研究
文研・英語圏／木下さき ファンタジー文学
文研・教人／朝倉愛里 教育人間学
文研・英語圏／猪熊慶祐 アメリカ文化・文学

開催内容

・研究発表

「皆が皆を笑う—クリスティ・ミンストレルズの笑劇について」猪熊

「科学技術ガバナンスにおけるUの課題」北

「考えるだけでは物足りないと感じるのはなぜか」蛸子

「対話における音声のインタラクションリズムについての研究」本井

「『ハリーポッターと死の秘宝』における死生観—中世説話・おとぎ話の影響—」木下

「現代社会における出会いに関する人間学的考察」朝倉

・読書会

J.P. サルトル『実存主義はヒューマニズムである』

【通算9回開催】

※上記を除く3回は運営計画協議等を実施

